

使うことがエコになる



エコ活動と聞くと、まず思い浮かぶのは“もったいない”という言葉——普段からマイバッグやマイ箸を持ち歩くように心がけるなど、とにかく物を消費しないことを第一に考えがちですね。しかし、「使うことがエコになる」という考え方があることをご存じですか？



「使ってはまた植えるというサイクルが成り立たないと、手入れも行き届かず、木が密集して荒れた森になってしまうことを知ってもらえればと思います」と語る活木活木(いきいき)森ネットワークの渡辺繭子さん(左)と多田知子さん(右)。

「木の国」日本の現状

日本は国土面積の約7割が森という「木の国」で、そのうちの約4割は人が植林した人工林です。古くから、日本人は木を中心に生活してきました。木造の家屋、燃料となる薪、シイタケ栽培など、森は常に人々の生活を支えてきたのです。しかし、戦後の高度経済成長期に木材が不足したため、輸入材に頼るようになりました。

戦後、先人が子孫のために植えた木が、現在使う時期を迎えています。しかし、安い輸入材の台頭や、間伐など森の手入れにかかる多額の費用、人手不足などの理由により森は放置されたままになり、木が密集して育ちが悪く、荒れた状態になっています。そのため、光合成の働きでCO₂を吸収するという木の役割や土砂の流出防止、多様な生物の棲みかといった森が本来持つ機能が失われつつあります。

手入れをしなければ森は育たない

人工林が本来の機能を取り戻すためには、下草刈りや間伐などを行い、木を「植える」「育てる」「収穫する」「使う」「また植える」というサイクルをきちんとまわしていくことが重要です。

植林をするときは多くの苗木を植えますが、木々が大きくなると隣同士で枝葉が重なりあい広げることができず、お互いの生長を妨げてしまいます。そこで、枝打ちをしたり、森林の混み具合に応じて間伐をします。

木を伐ることは、自然破壊だと思える人もいます。しかし、木は生き物で、太陽の光を浴びればすくすくと生長します。利用した分、また木を植えれば森はなくなりませんし、人工林を健康的に維持していくには手入れをしていくことが大切なのです。

